

待合

古典的表現とした
水盤露路への前哨空間。

通路を抜けた開口から
水盤と紙障子が現れる

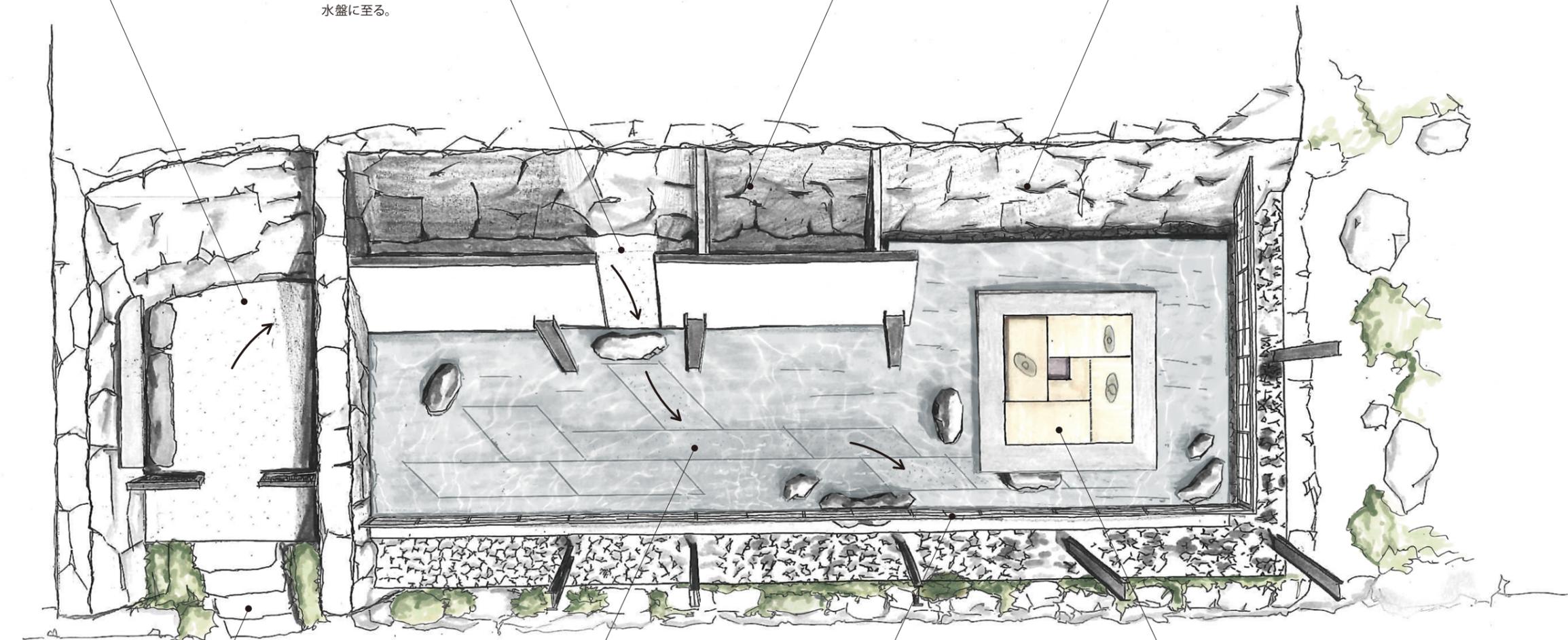
世俗と茶室を切り替える廊下
細長く薄暗い廊下を抜けて
水盤に至る。

水屋

収納を兼ねる。

岩盤壁

既存を延長利用し、
床の間として利用。



石段

水盤露路

動線となる床石は濡れた程度。
水を抜くと枯山水が現れ、
様々な景色をつくることできる。

浮遊した紙障子

茶席

京間の四帖半

CONCEPT

名建築には驚きや感動がなければならない。茶室における感動は沈黙に集約する。そこでは、客と亭主が世俗を離れて自然と一体となり、もてなしの心を愛でながら、時の移ろいに心を置く。そこはかたない色気と高貴さが漂い、空間に凜とした間を纏わせるのだ。この茶席は露地組した石に、極浅く水を張り巡らされた水鏡の上に浮かんでいる。水を通して石の一部が見え、一部は景石や洲浜として姿を現す。水鏡でかき消された水底は、石の広がる予感を残して人の動きと共に変化し、常に全容を隠し続ける。

客人は背後に陰りを秘めた水の上を歩いているような錯覚を憶えながら席入りするのだ。待合から細長く薄暗い通路を進んだ奥に開口が穿たれ、暗がり水鏡に切り替わる。正面には宙に浮いた紙障子が水平に連続する。低く切り取られた景色と紙障子は程よい間合いを生み、水鏡の陰影と共に空間に静けさを与える。茶室に沈黙を内包させることで、訪れた客人は風や水、光の移ろいや音に沈潜し、安らぎの時を過ごす事ができるのだ。